

研究ノート

近現代日蓮宗における「御降誕」事業の研究①

——大正十年「聖誕七百年」の一考察——

池 浦 英 晃

一、はじめに

「今や宗門は幕府時代の如き苛酷なる政府の干渉より脱し、特に明治巳丑（明治二十二年（一八八九）※引用者注）に於ける帝国憲法の発せられて、邦民等く信教の自由を得たるは、是れ即ち宗徒が閻浮統一の祖猷を実現すべき……吾が本化の宗風は振ふべくして未だ振はず、宗門第二の継紹者たらん者は奮て宗学の研鑽に従事し、本宗教理の蘊奥を極め、以て他日大に祖風の扇揚を謀り、宗勢の発展に向て励精努力するの覚悟無かる可らず¹」

冒頭に引用したのは、近代において初めて書かれた本宗の通史、『日蓮宗史要』（大正三年刊行）に著者である磯野本精師が記された言葉である。

本書の主題は日蓮宗の現代史記述にあり、明治維新以後の動揺のなかにあった宗門は、その当時においていまだ制度・機構の整備の途上にあるとして、明治以降の歴史的区分を「過渡時代」と磯野師は位置づけるのである。磯野師の鼓舞と期待はその「過渡時代」のなかで育ってゆくはずの「宗門第二の継紹者」へと向けられている。

さて、その頃の宗門の中枢にあつて、大正十年（一九二一）の「聖誕七百年」事業の中心的役割を担つたのは江戸末期から明治初期の年代に生れ、明治初期の宗門を支えたいわゆる「薩鑑修」、新居日薩師、吉川日鑑師、三村日修師らの門下にあつた先師たちであつた。²

彼らは宗門の要職に就き、聖誕事業の各方面において重要な役割を果たしていた。磯野師が本書のなかに薩鑑修門下として挙げられたところにしたがえば、薩師に小林日董師、久保田日龜師、久保田日遙師、小泉日慈師、守本文靜師、脇田堯惇師、本間海解師、河合日辰師、富田海音師、加藤文雅師、佐野前励師、修師の門下に風間随学師、佐野貫孝師、濱井日成師、鑑師の下に武見日恕師らの名前を見ることができ³る。

大正十年当時、河合師は日蓮宗管長として宗門大法要の導師を勤めるとともに各地に御親教に赴き、小泉師は齢八十で身延久遠寺の法主の座にあつた。脇田師、佐野貫孝師は宗会議員（佐野師は布教監を兼任）、濱井師は京都本圀寺貫首、風間師は発足まもない日蓮宗大学学長の職にあり、富田師は後述の『日蓮宗宗学全書』刊行に主導的役割を果たされた。

本稿では、聖誕七百年のご正当年である大正十年前後の『宗報』や教団関連の刊行物などの記述から聖誕七百年事業を概観し、ときに大正年間の時代的・文化的背景を参照して、この宗門の大きな節目を事業内容の一部を紹介し位置づけてみたい。

二、小湊の大法要

祝意と歓迎

宗祖降誕のご正当日の前日の大正十年二月十五日、日蓮宗管長・河合日辰師は大聖人ご生誕の地・小湊にあつた。

この日の午前十時に両国駅を出た管長・河合師、宗務総監・武田宣明師をはじめとする宗会議員の各師ら総勢六十

余名の一行は午後一時三十分に勝浦駅に到着した。当時、鉄道は勝浦駅までしか敷設されていなかったもので、そこから小湊までの道のりは自動車か馬車を使うしか他になかった。一行は自動車に分乗し、小湊をめざす途上の沿道で寺院檀信徒らの大歓迎を受けた。勝浦駅では約五百人の人々が集まり、玄題旗を掲げ、団扇太鼓を鳴らしたというし、興津町（当時。現勝浦市興津）は全戸に国旗を配り軒先に掲揚してあった。興津町の本山妙覚寺には小学校生徒約五百人が整列し、河合師らを出迎えた。誕生寺の聖誕大法要に向かう道中のいたるところで祝意と歓迎が示されたのだった。

いま、『宗報』に掲載された大法要報告のうちから、管長・河合師の行動を中心に拾い上げてみれば、一行の旅程は次のようにまとめられる。⁴

【二月十五日】

午前十時 六十余名一行で汽車にて両国駅を出発。

午後一時半 勝浦駅到着。自動車に乗り換え、出発。

二時半 興津・本山妙覚寺到着（参拝・読経・御経頂戴・管長法話）。

柴田一能師による小学生への法話。

四時 妙覚寺出発。

五時 誕生寺到着。

五時半 聖誕欽迎祝禱大会奉行。

河合師は誕生寺客殿に宿泊。その他宗会議員の各師は小湊町内に投宿。

【二月十六日】

午前八時 誕生寺出発。

八時半 小松原・鏡忍寺到着。一読、宝物拝観。

誕生寺へ戻る途中、妙蓮寺に参拝。

午後〇時五十分 誕生寺到着。

二時 慶讃音楽大法要奉行。開白文、天童稚児御経頂戴。

【二月十七日】

午前九時 国持大祈祷会奉行。

本堂前にて記念写真。

勝浦駅へ自動車にて向かう。

午後三時 勝浦駅を汽車出発。

午後六時半 両国駅到着。

※十七日午前中に鯛の浦（妙の浦）観覧予定も風が強く、波が高かったため中止となった。⁵

河合管長による開白文をここで再録してきたい。

開白

維時大正十年二月十有六日遺教の弟子日蓮宗管長大僧正日辰宗務当局と宗會議員とを率ゐ謹で讚歎の行を修し恭しく誦誦の筵を張り以て闡宗報恩の微忱を披瀝す

惟るに斯の妙士は末法海東の藍毘尼園にして諸天の甘露を澆きし瑞應の靈跡なり故に龍神悅懌して格護するを茲に七百年為に唱題の妙行に従ふもの已に斯の妙士を知らざるものなく異教未信の者と雖も亦高祖の四處道場中に於て其最たるを知るや久し矣

是を以て弟子等斯の妙士に集りて報恩の大会を虔修する所以のものは一は闡宗異体同心の聖訓を實現せんが為め一は以て洽く和敬孝順の道を布かんが為めなり

然則是の大会は撰折の根本慈悲を天下に示して寶土常住の在前を祈禱り兼て聖寿の萬安を祝延して二法冥合の円成を庶幾ひ回して以て恩山の一塵徳海の一滴に報し奉らんとす即與に皆懸りて是の一会に在り

仰ぎ冀くは

真慈俯して照鑑を垂れ給へ

南無妙法蓮華經 南無妙法蓮華經

大正十年二月十六日

日蓮宗管長大僧正 静照院日辰 敬白

宗門による慶讚音楽大法要を皮切りに、その後、池上本門寺、身延久遠寺、小湊誕生寺、村雲瑞龍寺、京都本圀寺、中山法華経寺の貫首らを導師に迎えた慶讚音楽大法要は六月十六日までの各日を選んで執り行われた（法要の行われた月の順）。

小湊の交通事情

大法要に臨んだ管長・河合師らの一行は小湊へ向かう折、沿道において大歓迎を受けたと述べたが、これには地元千葉の寺院と関係者の周到な準備と努力によるところが大きかったようである。町へ至る沿道の交通・旅館関係者はこの聖誕七百年を機に組合を組織し、遠方からもより多くの人々の集客にも努めた。東京方面からの交通手段と宿泊施設が掲載された「祝 御誕生七百年 小湊御案内」という一枚刷りのパンフレットを発行し頒布したという。そこには、

各位は此機会を利用して房総半島を一巡し而して各寺を往詣して信念を増進し并せて房州の国状を視察し如何なる風土か七百の昔大聖人を生み出せるかを請う先ず次の聖語を如説修行せられよ

「安房国はいみじき国ぞかし又曰く日蓮は安州の者なり」

大正十年一月 沿道寺院

とあり、地元寺院と旅館などが手を携え、協力しあつて聖誕事業を盛り上げようとした姿がうかがえる。⁶

また、法華会会員であつた田中桃堂氏が『法華』誌に小湊への叙情的な旅行記を載せている。「勝浦から出る薄汚い自動車は、それでも所謂文明の利器であるだけに心地よいほどの快速力を出して田舎道を走った。太平洋を東にし房総の高からざる丘岡を西にし、太平洋の彼方からの日光を受けつつ走る…いくつかのトンネルを超え、気味悪いような海岸の断崖を通過して自動車は小湊に着く。⁷」

自動車といつても当時は今のようには快適ではなかつたろうし、舗装されていない道々をゆけば車体は土埃で汚れていたのであらう。

東京から小湊までの道程はどのような様子であったが、生誕の年に向けて小湊と周辺の町は、参拝に訪れる多くの人を受け入れるための準備に励んだ。

誕生寺の記念碑

聖人ご生誕の地であり、宗門音楽大法要の会場ともなった小湊誕生寺には参道に「七百歳記念」と刻まれたひととき大きな記念碑が建つ。碑の裏面には「紀元二千五百七十九年 聖誕六百九十八年 大正八年十一月十二日建之」とあって、正当年の二年前の御会式の日が刻まれている。寺尾英智師によれば、当時の誕生寺貫首にあった第六十七世・今井日誘師が「日蓮聖人誕生の靈跡として立派に生誕七百年の佳辰を迎えるべく、各地への布教と境内整備に力を注がれ」、浄財寄進を募り、寺観の整備を進めたという。その事業を進めるなかで建立された宗祖降誕七百年を記念する石碑である。⁸

二、記念大会と布教

都市部における記念大会

次に都市部における聖誕を祝う行事について見てみたい。

東京の寺院たちは聖誕七百年を迎えるにあたり、「聖誕七百年紀年東京奉賛会」を組織し、記念大会を行っている。しかし、二月十四日から三月二十六日までという長い期間に亘ってあまりにも多くの会場で祝典や講演が行われたため、『宗報』紙上には掲載しきれなかったであろう。東京に関しては大会行事の内容の詳報がなく、会場名と講演者名が挙げられているのみである。⁹

そこで、西の都市を代表して大阪における聖誕行事の様子について少し詳しく記してみたい。

大阪市日蓮宗聖誕記念慶典

大阪市内の日蓮宗寺院は二月十六日午前九時、一斉に百八つの梵鐘を鳴らしてこの日を迎えた。すでに二月いっぱいを「宣伝期間」と定め、毎夜、提灯行列や旗行列によって市内への喧伝を始めていた。

慶典行事は中之島公会堂を会場に行われ、土佐堀と堂島から会場までの約六〇〇メートルの練供養が会場に向かった。大阪では「橘コドモ会」の講社が百八十も結成されており、子供たちの参列が多く、唱歌隊による合唱や稚児行列が式典に花を添えた。この日集まった人員は一万五千人とあり、『法華』誌は「大阪市日蓮宗空前の威儀と云うべし」とその模様を報じている。¹⁰

また、大阪の寺院や檀信徒の総意として「大阪本化高等女学校」（大会では正式名称を「名浄高等女学校」として宣言）の設立をこの聖誕事業の中心に位置づけており、慶典行事のプログラムのひとつでその創立宣言も発せられた。¹¹ 都市部における聖誕行事は、慶讃法要、講演会、布教隊、道路布教（街頭布教）、提灯行列等により構成されていた。その他各地で行われた記念大会の模様も『宗報』をはじめとした機関誌などによって宗内に伝えられた。

日蓮聖人鑽仰会の結成

全国で催される聖誕行事を盛り上げるためには新しい組織の力も必要とされた。すでに明治末年頃から各大学に「日蓮聖人鑽仰会」が設けられてきていた。東京帝大、第一高等学校の「澗治会」、東洋大学の「橘香会」の活動はとくに盛んであったという。日本大学では「日蓮講座」が開かれ、その他の大学でも日蓮聖人に関する研究会が持たれていた。¹²

学生によって組織されたものに限らず、聖誕七百年前後の『宗報』、『法華』には名称は異にしても、「鑽仰会」に類するものが続々と結成されていたことがわかる。

大正という時代は労働や文化の分野で新しい組織や団体が次々と生まれていったことでも知られる。そこには労働者でいえば急速な近代化の歪みによる社会問題への対処という側面があったろうし、文化の面では新思想や文化の流入と勃興があったように思われる。

聖誕事業を盛り上げ、その担い手を組織化していくという意味では、このような新しい組織・団体の興起という潮流も「鑽仰会」の結成を後押ししたように思われる。¹³

コドモ会の発会

先の大正での行事でも示したように、聖誕記念大会を賑やかにしたのは子供たちの存在であった。各地で行われた聖誕行事のプログラムには子供向けの講演や劇あるいは子供たち自身による合唱がよく見られる。

「コドモ会」の発会が全国的に波及したのは聖誕七百年を機にしていると指摘される。ご正當翌年の大正十一年には宗務院は児童課を新設し、「コドモ会運動」をさらに推進するため、「立正児童教会連盟」も発足させている。¹⁴

大正時代は子供文化が生まれた時代でもあった。大正七年には先進的な造形感覚にあふれた挿絵を満載した児童向け雑誌、『赤い鳥』がその嚆矢とされ、その後、大正十一年、絵雑誌『コドモノクニ』が東京社（のちの婦人画報社）から創刊された。『コドモノクニ』もまたモダンな色彩と西洋画の手法による挿絵が多く、詩、絵、童謡を子供たちに提供した。¹⁵

宗門が設立を後押ししたコドモ会が「コドモ」とカタカナで表記されていたのは、こうした大正時代特有の文化的背景があったからである。「日蓮聖人の御誕生を祝う」という聖誕事業の基本的コンセプトが子供たちを対象とした新しい布教へと結びついた。

布教体制とその内容

全国で行われた聖誕行事で法話や講演を行うために、宗門では聖誕七百年に合わせて新しく布教師を任じている。大正九年十二月に「聖誕記念特派布教師」として二十六人を任命（のちに二人追加され二十八人）、その後、それとは別に「聖誕七百年記念宣伝布教師」を置いた。聖誕行事において、特派布教師は宗門から派遣された正式な説教者として講演をしたようである。¹⁶

また、当時の資料には各行事で行われた内容として「宣伝」という用語が散見されるが、「布教」または「伝道」ととらえて差し支えないようだ。ただし、先に述べた大阪の聖誕記念伝道では、日蓮聖人の教えを簡略に説明したものを「宣伝紙」、市民に対して覚醒を促す内容（多くは国家意識の高揚）を記したものを「警告箋」と呼んでおり、頒布場所や対象により伝える内容に工夫があったように推察される。

四、学問と出版事業

『大崎学報』の記念号

日蓮宗大学は『大崎学報』第五十九号を「聖誕七百年記念出版 日蓮聖人号」として日蓮聖人に関する論考のみを集めた記念号を出した。大学の教授、講師陣はもとより広く門下内外から論稿が寄せられた。原稿依頼が遅れたため予定の半分しか原稿が集まらなかったということだが、巻頭に「：この秋（とき ※引用者注）この日に思想の羅針、組織の指揮者、行為の模範である日蓮聖人の降誕を迎へたのは何といふ悦びであらう。この悦びは私共の独占すべきものではない。『宣伝を忘るる勿れ』の金言に従って同胞人類の凡てに頒へべきではあるまいか。かやうに考えて本号は成つた」とおそらく編者である望月歆厚師の言葉を掲げ、学問の分野から聖誕の喜びの共有を促している。¹⁷

御遺文の口語訳

また、大正十年に訳業に着手されたと思われる『原文対照口語訳 日蓮聖人全集』は、監修に清水龍山師を迎え、御遺文本文の訳者に外山英酋師、加藤文雅師、望月歆厚師らが当たった全七巻の御遺文全集であり、大正十四年に発行された。¹⁸やはり聖誕ご正当年を機にしてこの事業が始まったことが特筆されよう。巻頭言では、ここで行った御遺文の口語訳という仕事が「私共は聖文を瀆す罪の深いことを只管懼るものであります」と恐縮しつつも、「時代は切に求めて居ります。與へるのは私共の責任であります。かう考えた結果、たとえ聖文を瀆し奉る罪を冒しても、これに因て、一人でも多く聖教に親み得られるならばと、忝くもこの聖業を発願いたしましたのであります」と御遺文訳が時代的要請であることをうつつたえている。¹⁹

『宗学全書』の完成

『日蓮宗宗学全書』は、宗典の「湮滅」^{いんめつ}を憂いた富田海音師と佐野貫孝師らの発起によって大正五年に実際の作業に着手されたが、すでに蒐集、整理、編纂作業が行われつつあったなかで、大正七年には宗会の議決を以て編纂費の予算がつき、大正九年、「日蓮宗宗学全書刊行会」（総裁・河合日辰師、会長・風間随学師）の創設により刊行が目指された、聖誕七百年の大きな事業であった。²⁰

その編纂経緯は再刊の際に、第一巻『上聖部』巻末に付されたと思われる「日蓮宗宗学全書刊行誌」と、昭和三十三年に追加再刊事業の成った第二十三巻『史伝旧記部』巻末の「日蓮宗宗学全書第二版後跋」に詳しい。刊行会による「趣意書」には、「今や明春聖誕七百年を迎へんとするに当り、既集の秘什宝策を公刊し、以て宗学の全系を一部に統べ、各派の法流を一帙に収め、一は以て根本的各派統合の機運を促進し、一は以て古書散逸の憂を除き、永く宗学界に貢献する所あらんとす」とされている。聖誕七百年のご正当年である大正十年から逐次刊行された。

この事業を起こされた富田海音師は、編集作業の途中であった大正十二年三月、日蓮宗大学に置かれていた編集室において執筆作業中に遷化された。富田師は大正十五年に成った『宗学全書』の刊行の完了を見ることはなかった。²¹

まとめに代えて

さて、ここまで聖誕七百年事業の一部について見てきたが、本来ならば少し宗門の機構や宗会の動向・発言などにも目を配れば、聖誕事業へ至るプロセスと先師自身による事業総括が見えてきたかもしれない。また、社会の側から日蓮宗の聖誕行事がどう伝えられていたかを確認するため、当時の一般紙をまとめた新聞集成など数種類にそれを求めたが、見つけることができなかった。『宗報』創刊以来、宗門機関紙としての地位を失っていたとはいえ『日宗新報』も調査しておきたかったが、宗門機関や立正大学にも所蔵を確認できなかった。

奉祝の年である大正十年に限ってではあるが、なるべく広く聖誕に関わる項目を挙げてみたつもりである。かようにすでに百年近く前の資料は散逸を免れず、大正時代以降の宗門の歴史を確認する作業は今後も継続したいと考えている。これからの課題としておきたい。

聖誕や遠忌という節目の事業・行事は教師個人にとっては、その時にどのような年齢、立場でその役割・仕事に携わるかによっても異なるうが、宗祖への報恩と鑽仰の念を新たにする機会であることに変わりはない。

こうしてみると、宗門をあらゆる苦難から守ろうとされた「薩鑑修」世代からバトンタッチされた世代の先師たちが、将来世代に残しておくべき事業を必死になって成し遂げたのが「聖誕七百年」の意味ではなかったろうかと考えさせられる。

大正十年から五十年後の聖誕事業はどのようなものであったか。次に、われわれの関心は必然的にそちらにも向かう。次は「降誕七五十年」について調べてみたいと考えている。

最後に影山堯雄師の通史である『新編 日蓮宗歴史』から言葉を引きたい。聖誕七百年を謳ってはいないもの、やはり大正十年の刊行である。大正時代の宗門の熱気を伝えているように思われる。

「世は大正の昭代に在り、法は承けて我に存す、時既に至りて機縁の待てる事久し、先陣業に斃れて後陣来れるの何ぞ遅きや、本化の大法を宇内に伝え、世界群類の色心を救済せん事、是れ寔に祖猷に報じ、又以て前賢の鴻恩に酬ゆるの所以なり。」²²

【脚注】

1 磯野本精、『日蓮宗史要』、大正三年、平楽寺書店、一五二頁。『宗報』掲載の広告には「開宗已来今日に至る宗門史を組織的に叙述せるもの、巻頭に総大五山歴代年譜を載せ、紙上に史上の重せる人物に就いて註解を施す」としている。

以下、引用にあたっては、漢字は原則として新字体に直し、カタカナはひらがなにあらためたが、句読点、旧かなづかいはそのままとした。また、先師のお名前は役職・僧階等に関わらずすべて「師」で統一した。ご了承頂きたい。

2 本文中では以下「聖誕七百年」と記述する。管見のかぎり、大正十年の宗祖降誕七百年は「聖誕」という呼称を使う場合が多く見られたためであり、当時の使用頻度を考慮し、「聖誕七百年」と統一することとした。

3 磯野本精、同書、一五五～一五六頁。

4 『宗報』、大正十年三月号、十一～十四頁。管長をはじめとする一行の行程を含めた宗門による慶讃大法要のすべてはいまでいえばドキュメント風に掲載された。

5 『宗報』同号、十三頁。「開白文」も同頁に掲載。

6 山本光正、「第二章第五項 観光の町（五）日蓮聖人誕生・開宗七百年と観光」、『ふるさと資料 天津小湊の歴史』下巻、平成十年、天津小湊町史編さん委員会編、二一八～二一九頁。

- 7 田中桃堂、「小湊行」、『法華』、大正十年二月号、法華会、九十八頁。田中氏は法学者であり法華会メンバー。
- 8 寺尾英智、「15 日蓮聖人生誕七百年記念碑」、「誕生寺 小湊山史の散策」、平成十二年、誕生寺。
- 9 なお、『宗報』、大正十年四月号（十四〜十六頁）に東京奉賛会主催による最後の大きな行事として、上野公園・凌雲台での「日蓮宗宗徒大会」の概要があることを付記しておく。また、全国各地からも聖誕行事の報告が同年の『宗報』五月号あたりから続々と寄せられ、ひとつひとつの記事は短文ではあるが、その概況を知ることができる。
- 10 練供養の隊列が興味深い。参考にしてその形態を載せておく。「伶人」とは音楽隊の意である。

先払―警畢―宣伝旗(紫)―分隊旗(紫)―三大誓願旗―布教旗―伶人(七人)―稚児―分隊旗(白)―伶人(四人)―寺院―尼僧―分隊旗(黄)―唱歌隊―分隊旗(赤)―宣伝旗―檀信徒及び講員一同
- 11 『法華』、大正十年五月号、法華会、九十三〜九十四頁。
- 12 第一高等学校の「澍治会」の目的は「日蓮上人の人格及び教義を研究して、各自の品性を高め、真の人らしい人になる助けにしたいということである」と小林一郎氏が『法華』誌に記している。
- 13 「日蓮聖人鑽仰会」とは直接に関連しないが、成田龍一氏は原敬による政党内閣結成以後の地方ムーブメントとして、松尾尊兌氏が提唱した「市民政社」概念を援用しつつ、「地方的市民政社の台頭」を挙げる。地方における政治的な組織である青年会の結成に「新しい世代による地域秩序が模索されている」という特徴をみている。成田龍一、『大正デモクラシー』、平成十九年、岩波新書、九十八〜九十九頁。
- 14 『日蓮宗事典』、「童話布教」の項を参照。八七五〜八七六頁。
- 15 『児童文学事典』（東京書籍）、「コドモノクニ」の項を参照。二七二頁。また、『コドモノクニ』に関する論考としては、濱口由夏による「絵雑誌『コドモノクニ』に現れた子ども像」、『人間社会学研究集録1』、大阪府立大学、平成十八年。その他の児童文学研究の分野に多い。

- 16 日蓮宗では当時、全国を十七の教区に分けていた。それぞれに布教監と録司（現在の宗務所長にあたる）が置かれていた。宗門が任命する「特派布教師」は布教院長の推薦を受けて、管長の任命が必要であり、その布教範囲を「全国各教区及軍隊監獄其他指定の化境」とされている。「宗則第五号 布教条例」の「第三章 内地布教規則」による。島田勝存編、『日蓮宗法規』、大正元年、日宗新報社、五十〜五十二頁。
- 17 『大崎学報 聖誕七百年記念出版 日蓮聖人号』第五十九号、大正十年、日蓮宗大学同窓会・大崎学報社。
- 18 清水龍山編、『原文対照口語訳 日蓮聖人全集』全七卷、大正十四年、日蓮聖人全集刊行会。
- 19 同書、第一卷「序言」、一〜三頁。
- 20 『日蓮宗事典』、「日蓮宗宗学全書」の項を参照。二九八頁。
- 21 『宗学全書』編纂のため稲田海素師らは全国の門下各派各本山をまわり、蔵本の閲覧と対照を行った。その膨大な仕事量を影山堯雄師は『新編 日蓮宗年表』において稲田師の日記から拾っている。
- 22 影山堯雄、『新編 日蓮宗歴史』、大正十年、同融社、二二〇頁。